全海運所属組合の横顔

連載　第 12 回

中国地方海運組合連合会

その 6　隠岐地区海運組合

【隠岐地区海運組合の概要】

事　務　局　〒 685-0015　島根県隠岐（おき）郡隠岐の島町港町大津 2-9-9
電話 08512-2-4693　FAX 08512-2-5558
隠岐の島町西郷港より徒歩 10 分

理　事　長　酒井　一昌　㈲ 酒井材木店 代表取締役社長

事 務 局 長　桜谷　幸雄　専務理事

事務局員数　男子 1 名（事務局長含む）

組 合 員 数　登録運送事業者　1 社
登録貸渡事業者　2 社
届出運送事業者　2 社
合　計　5 社

所属船腹量　貨物船　4 隻　1,360 重量ﾄﾝ

酒井理事長（左）と桜谷専務理事

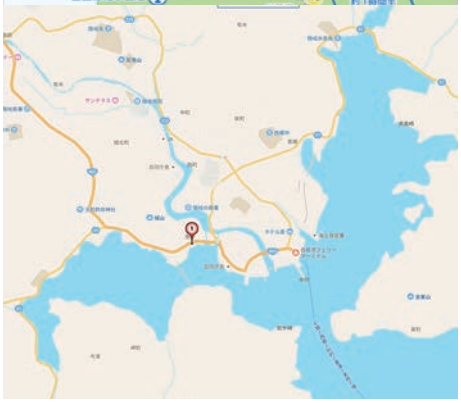
【地区組合事情】

隠岐地区海運組合は、中国地方海運組合中で似島地区海運組合と並び創設以来今日まで、統合することなく独自の歴史を辿って来た離島の地区組合である。

隠岐島（おきのしま）は、島根県の北東沖合 60km、4 つの大きな島と 180 の小島からなり、4 つのうち知夫里島、西ノ島、中之島の西部 3 島を島前（どうぜん）と呼び、東部にある最大の島の島後（どうご）と区分している。島後の隠岐の島町は、隠岐島の中心で人口も最も多く、隠岐島総人口約 2 万人のうち 7 割を占めている。

隠岐島までのアクセスは空路と海路がある。空路は東京から 1 時間 30 分（JAL）の出雲空港で乗り換え、隠岐空港までは 30 分（JAC）だが、出雲～隠岐便が朝 9 時発（2020 年 7 月）の 1 便のみで、折り返しも 30 分後の 10 時隠岐発（同）の 1 便だけ。伊丹空港と隠岐島を結ぶ便（JAL、1 時間）もあるが、折悪しく訪問した日は新型コロナウイルスによる乗客減少の影響から休航となっていた。

海路の場合、JR 米子または松江駅から接続バス（JR 米子発境港線）で境港または七類港に出て、島後の西郷港まで高



隠岐島の位置（島根県 HP より）（上）と隠岐地区海運組合（Yahoo! 地図）

速艇で約1時間、フェリーで2時間半となる。東京～米子は空路（ANA）で1時間30分、JRだと新幹線のぞみで東京から3時間30分の岡山で特急やくもに乗り換えて2時間30分かかる。

従って、東京～隠岐島に行くには、最短でも前日に松江泊、当日に隠岐泊で翌日隠岐発となり、2泊3日のコースとなる。

事務局を併設している桜谷氏宅

島後の隠岐空港から車だと、西郷港をまたぐ西郷大橋を渡って、国道485号線を海岸沿いに走り、街の中心地である西郷港まで10分弱で着く。ちなみに西郷大橋は、本四連絡橋・尾道～今治ルートのしまなみ街道の架橋試作に造られたという。隠岐地区海運組合の事務局は、西郷港の隠岐汽船乗り場から徒歩10分、車で3分のところにある桜谷幸雄専務理事の自宅に併設されている。以前は西郷港に近い隠岐合同庁舎そばに借室していたが、組合員の減少もあって合理化のため移設した。

隠岐島は離島だけに、本土との交流が船に依存せざるを得ず、古代から自然発生的に海運が動脈源となって来た。隠岐の産業は、地元の隠岐杉に代表される林業が主体。地元には享保年間（1716～1736）、本土向けに木材を船で積み出した記録が残されているが、江戸時代には和船による本土との交易が盛んになり、明治時代になると北は新潟から南は九州まで活動の場を広げ、巨万の富を築いた船主もいたという。

隠岐空港（上）と西郷港の客船バース

隠岐島では、日本海の荒波に堪える丈夫な船質の帆船が造られ、明治中期の南極探検隊用にも使われたというが、第1次世界大戦（1914～1918）後は北海道から朝鮮、青島と隠岐の船主が行動半径を広げたとされる。

第2次世界大戦後、地元では100総㌧級の木船が10数隻建造されたが、資材は地元の杉、松材。地元船主はこれらの船で復興資材としての木材を北陸、山陰各港に運び大きく潤った。しかし、昭和37～38年（1962～1963）頃からは輸入外材に押され、昭和50年（1975）頃から合板が大量に輸入されるようになると、急速に地元木材は生産量を落としたのだった。

林業に次ぐ隠岐の産業は水産業である。本土との間は、周囲に暖流と寒流の接触点があり、日本海でも最良の漁場。とりわけ、江戸時代からイカ漁を中心とした漁業が盛んである。漁業の大半は沿岸漁業の零細経営で半農半漁が多く、専業漁業は2割程度とされている。

隠岐島は、全国でも数少ない自給自足が出来る離島でもある。農産物は地元住民を充足出来るだけあり、竹下元首相、竹下亘衆議院議員の実家の酒蔵竹下本店（島根県雲南市）が隠岐島の米を買いつけているという。

隠岐島には古くから、「牛突き」と呼ばれる地元独得の闘牛もあり、愛媛県宇和島市、岩手県久慈市、新潟県小千谷市、同長岡市、鹿児島県徳之島市、沖縄県うるま市など闘牛のある街との交流もある。牧畜も盛んで島前には牧場と畑作を兼営し、収穫の前後数カ月、土地

に休閑を与えながら、牛馬の排泄物を自然の施肥とする牧畑農業がみられ、隠岐島は黒毛和牛の産地でも知られている。

木造運送法時代、隠岐の内航海運事業者は山陰地区海運組合に所属していた。木材、農水産物を境港、松江、浜田へ輸送していたことからだが、昭和 39 年（1964）3 月に小型船海運組合法に基づき隠岐地区海運組合を設立し、独立した。昭和 44 年（1969）4 月に、内航海運業の許可制移行を機に、個人運送業だった組合員を集約して内航運送業の隠岐島内航海運協業組合を設立し、組合員がその傘下船主となった。

材木埠頭（上）と 5,000 重量ﾄﾝ砂利埠頭

隠岐地区海運組合の設立当初は、木船 16 隻の構成だったが、その後、木材出荷の下降により地元船主が石材、雑貨輸送に方向転換。以降は次第に業者数、船腹量も減少し、現在では 5 事業者で所有船が一般貨物船 4 隻、1,360 重量ﾄﾝとなっている。そのうち 1 社は所有船を持たない許可運送業者の隠岐島内航海運協業組合。2 社、2 隻、1,039 重量ﾄﾝは一般貨物船資格のガット船で、島後の隠岐の島町の貸渡業者の所有。運送業の隠岐島内航海運協業組合がこれを運航している。また、2 社、2 隻、321 重量ﾄﾝは届出運送業者で、うち 1 社は島前の海士町（あまちょう）に会社があり、1 社は隠岐の島町から移って現在、本土の境港に会社がある。

隠岐島では元々組合員に製材業、材木業の兼業者が多かったことから、海運組合事務局は創業期以来長らく、木材埠頭の材木業組合と同居していたこともある。2020 年 5 月に就任した酒井一昌隠岐地区海運組合理事長は、地元で老舗の材木業（酒井材木店）でもあり、339 重量ﾄﾝ型の一般貨物船資格ガット船を所有している。

隠岐島の経済を支えるのは離島振興法による公共事業で、公共工事予算の多寡が島の景気を左右する側面もあるという。隠岐島の海運の主要貨物は、木材と砂砂利石材。石材は古代から隠岐島で産出され、島後の西郷町（現隠岐の島町）津井と五箇村（同）久見で、打製石器の原料としての黒曜石が産出され、紀元前 5,000 年頃の縄文早期前期の石器製作跡と推測される宮尾（みやび）遺跡（西郷町津井）、中村湊（なかむらみなと）遺跡（西郷町久見）が残されている。しかし、現在産出される砂利、石材は、材質が舗装用アスファルトに適さないため本土の松江、安来から隠岐島の各港へ搬入されている。

また、かつては、地元の漁獲物が鮮魚運搬船で本土まで運ばれていたが、現在では半分がトラックとフェリーに取って代わられている。

【隠岐島の歴史】

隠岐島は、小さい「島国」である。島前と島後の 4 島を合わせても、面積は琵琶湖の半分しかないが、それでも古代から防衛上の重要拠点とされ、島でありながら淡路島、佐渡島とともに「国」として扱われて来た歴史がある。

「隠岐」の名称は、山陰の遠く沖合に存在するからともいわれるが、伝説によると伊弉諾尊（いざなぎのみこと）と伊弉冉尊（いざなみのみこと）の第 1 子である天照大神（あまてらすおおみかみ）は、両尊が国造りの 4 番目に生んだ島の隠岐島で大木をみて、「美しい御木（みき）」と称賛したといい、これが「御木国（おきのくに）」に変わったとされる。いかにも出雲の沖合の島らしい伝説である。

また、隠岐国は神亀元年（724）に遠流の地と定められて以来、江戸時代末までに約3,000人が流刑になっていることでも知られる。隠岐島への流刑第1号は神亀7年(724)、柿本人麻呂の子息で万葉歌人柿本窮都良麻呂であり、天武天皇皇子の大津皇子と共謀した謀反の罪で流人となったとされるが、窮都良麻呂の出自や官途については不明である。流人となった高貴な人物で著名なところでは、承久の変（1221）で鎌倉幕府に敗れて隠岐島に流罪なった後鳥羽上皇がここで失意のまま崩御している。また、元弘の乱（1331）で倒幕を企てた後醍醐天皇は、北条氏に敗れて隠岐島に流刑となるが、19年後に倒幕の動きから脱出し楠木正成、足利尊氏、新田義貞らに支えられて鎌倉幕府を滅亡へと追いやっている。

隠岐国分寺の境内に残る後醍醐天皇在所跡

さらに隠岐島への流人を拾い出すと、遣唐副使の任を拒否して嵯峨上皇の逆鱗に触れた平安時代の漢詩人の小野篁がいる。彼は飛鳥時代の官人ある小野妹子の子孫で、平安時代の女流歌人小野小町の祖父にあたり、日本古代国家の基本法の公的解釈を記したひとりである。承和9年(842)7月に承和の変で謀反を問われた大伴一族の伴健岑。その他にも、安和2年（969）3月の藤原北家嫡流により、他氏排斥する安和の変で追補され失脚した藤原氏本流の藤原千晴。長徳4年（998）12月に同族の平維衡と合戦を繰り広げて位階剥奪された平致頼。対馬守に任じられながら九州で略奪殺害の罪を課せられた源義親。源頼朝の麾下で平家撃退に功績をあげながら失脚し、勅令違反の罪に問われて地頭職も追われた板垣兼信。源頼朝に仕えて近江、長門、石見、壱岐の守護を務めながら、延暦寺との争いで罪を問われた佐々木広綱とその一族。慶長14年（1609）に後陽成天皇の女官と密通した罪に問われた公家で、権大納言飛鳥井雅庸嫡男の飛鳥井雅賢など、隠岐の流人となった貴人は、枚挙にいとまがない。だが、その多くは政権争いに敗れた高級政治犯であり、都の文化人であったことから、島民は彼らを罪人扱いせず、丁重にもてなした。そのため隠岐には流人達が伝えた文化の跡が現在も残されている。流刑地の歴史は、遠隔の地隠岐島をかえって都と直接結び続け、高度な文化風習が断続的に流入するという独特の条件のもと、特殊な風土を形づくって来たからである。また、隠岐島には歴史的に知られた高位の人々の興味深い逸話が数々残っているのも、今日となっては隠岐島の文化的財産といえる。

また、島前中ノ島の海士町にいまも続く名門の村上家は、48代を数える名門旧家で、後鳥羽上皇が隠岐に流されたとき共に隠岐に渡った瀬戸内海の村上水軍の一族とも、村上天皇の末裔ともいわれる。当時の当主は本来、流人を管理する立場だったが、失意の上皇を慰め忠勤に励んだだけでなく、上皇の隠岐脱出にも力を貸したされる。上皇薨去後は丁重に弔い、今日に至るもその墓守を務め続けている。余談ながら、その本家が歌手西川峰子さんの旧婚先であるとして、マスコミを騒がせたこともある。

隠岐島の行政区分の変化も興味深い。明治維新で松江藩から朝廷に編入された隠岐島は、明治2年（1869）6月に隠岐県となったのち、同年8月に隠岐県と浜田藩と旧石見銀山料をひとつにした大森県に編入され、3年(1870)1月から大森県が県庁を那賀郡浅井村（現浜田市）に移転して浜田県に改称、4年（1871）11月から島根県、翌月12月から鳥取県に所属替えがあり、さらに9年（1876）8月から再び島根県に戻され、現在に至っている。

【海にまつわる神社】

隠岐島は伝説の離島という土地柄だけに、古代から継承する海にまつわる神社が多い。

その代表的な神社を紹介しよう。桜谷専務理事のアテンドで巡った。

水若酢神社

隠岐国の一宮でもある水若酢神社は、島後の隠岐の島町五箇地区にある黒松に囲まれた古社。一宮とは、その地域で最も社格の高い神社をいう。主祭神は水若酢命。創建は神代で、第10代の崇神天皇時代といわれ、祭神の水若酢命は、隠岐国の国土開発と日本海鎮護の任務にあたった神と伝承され、隠岐島北端の海上から上陸し、大峯山（507.6m）を越えて旧五箇村に入ったとされている。

水若酢神社本殿（上）と古典相撲の土俵

水若酢神社は、平安時代の全国神社一覧『延喜式神名帳』にも記載される由緒ある神社。社殿周囲に小規模な古墳もあり、この地が隠岐島の中心だったことをうかがわせる。現存する本殿は寛政7年（1795）の建立で、後述する隠岐国総社の玉若酢命神社と同様に、様式は隠岐造りで国の重要文化財である。

地元の郷土史家の中には、隠岐島の神社が国造り神話が伝わる出雲より古いとの説もあるが、隠岐島北側が大陸への窓口として開かれ、文化が流入したであろうことは想像に難くない。

海上安全御守護札

境内には、隠岐古典相撲大会が奉納される土俵がある。20年に1度の遷宮奉祝記念など、島内での祝い事に開催され、島を挙げて夜通し取り組みがある。古典相撲というが、元々は神へ奉納する「宮相撲」とされていた。映画「渾身 KON-SHIN」（原作川上健一、監督錦織良成、主演伊藤歩、青柳翔）の舞台ともなった。

水若酢神社から峠を越えた久見地区には『延喜式神名帳』記載の伊勢命神社があり、江戸時代編纂の隠岐国の地誌『隠州視聴合紀』では水若酢神社を外宮、伊勢命神社を内宮としている。

偶数年の5月3日に開催される例祭の『神幸祭』は、天下泰平と五穀豊穣を願う『水若酢神社祭礼風流』として県民俗文化財に指定されている。一之森神社、八王子神社などの気候安定と五穀豊穣を願う『隠岐武良祭風流』、玉若酢命神社の悪霊退散儀礼の『御霊会風流』と並んで隠岐の3大祭りのひとつに数えられている。10歳までの男児が「山」と呼ばれる山車を曳く「山曳神事」が中心である。明応年間（1492～1500）に水害で社殿が流失。河口付近で発見された御神体を氏子達が旗を立て、笛や太鼓を鳴らしながら引き揚げた故事に倣い、貞享5年（1688）頃から始められた神事で、流鏑馬神事なども斎行されている。

玉若酢命神社

玉若酢命神社は、島後の玄関口である西郷港近くの甲野原にある古社で、祭神は玉若酢命。社伝では、日本武尊の父の景行天皇が皇子を各国に分置し、隠岐国に遣わされた大酢別皇子の子が玉若酢命であるとしている。海から上陸して来た航海の神である。玉若酢命神社は、隠岐国の国府に赴任した国司が参拝する隠岐国の惣社にもなっている。惣社とは特定地域の神社の祭神を合祀した神社のことで多くの場合、国衙の近くに置かれた。国衙とは、日本の律令制で国司が地方政治を担った役所の置かれていた区画。国司は定期的に国内の主要

玉若酢命神社本殿

な神社を巡拝する義務があったが、のちに便宜上、これらを国衙の近くにまとめて祀った。惣社はのちに国司と組んで権力を握り、その国の神官の任免、神領の配分などに影響力を及ぼしたが、律令体制の崩壊によって次第に衰微し、中世に至ると一宮や守護大名の影響が強い八幡社にその地位を奪われた。

玉若酢命神社の宮司は代々、大国主命の後裔ともされる古代の隠岐国造である億岐家の末裔が勤めて来た。国造とは現代の地方行政の首長に当たる豪族である。

現存する神社の本殿は寛政5年（1793）築の隠岐造りといわれる独特の様式で、国の重要文化財。慶応2年（1866）建立の旧拝殿、嘉永5年（1852）建立の随神門も国の重要文化財である。境内には、樹高29m、樹齢2,000年といわれる国の天然記念物の八百杉があり、若狭国から来た八百比丘尼が参拝の記念に植えたと伝わる大木である。神社の北西側の丘陵には、前方後円墳1基（8号墳）と円墳14基の計15基からなる玉若酢命神社古墳群がある。

社殿のある甲野原は、「国府の原」の転訛で、古代から隠岐の中心であったことがわかる地名だが、国府・国庁の遺構は発見されていない。

水若酢神社には渡来系伝承も残り、玉若酢神社には中央との結び付きが感じられ、隠岐には2つの歴史の流れがある。

水祖神社

水祖神社の創建は不詳。社殿後背の山は古墳であるともいう。祭神は彌都波能売神。この地では古来、隠岐に赴任した中央高官で、帰郷することなく生涯を終えた者達を海岸で、丸く美しい石を積上げ慰霊したが、それが神社の始源とされている。

水祖神社本殿

『古事記』によれば彌都波能売神は、伊弉冉尊が国産み、島産みを終えて火之迦具土神を出産したときに、その尿から和久産巣日神とともに生まれている。火之迦具土神は火の神であったため、伊弉冉尊は出産で女陰に火傷を負い、これがもとで死んでしまったが、怒った伊弉諾尊が号泣しながらこの児を愛剣十拳剣で惨殺したところ、その五体から複数の神々が誕生したとされている。

伊弉冉尊の尿から生まれた彌都波能売神は泉、井戸など水源、灌漑用水の神として信仰され祈雨、止雨の神得もあるとされ、日本で代表的な水の神である。その双子である和久産巣日神は穀物の生育を司る神とされ、子の豊宇気毘売神は現在の伊勢神宮の外宮に主祭神として鎮座し、内宮の天照大神の食事を司る御饌都神であり、一般には衣食住、産業の守り神でもある。

水祖神社は、戦国時代の元亀3年（1572）頃、尼子家忠臣の山中鹿之助幸盛が隠岐国府尾城主佐々木為清に援軍を求めて来島した際、主家尼子家再興を祈願に参詣したと伝えられる。

また、水祖神社は戦国時代までに、菅原道真を祀る天満宮と認識されており、現在も「天神さん」の通称がある。昔、中條地区八尾川上流沿いの小さな祠に道真を祀った天神社があり、ある年の大水で その祠が水祖神社境内まで流出、これを機に合祀したともいわれる。神社の森の裾野は満潮時には浅瀬となり、潮が引くと陸地になるので、その有様を水の原と呼び、「みのはらの天神」と呼ばれたともされる。戦国時代の天文22年（1554）の棟札では「天満大自在天神」とある他、江戸時代の正保3年（1646）、寛文10年（1670）の棟札でも天満天神を祀る社とある。寛文7年（1667）の『隠州視聴合記』や貞享5年（1688）の『隠州記』にも天満宮として記載がみえる。その後、幕末の『隠岐古記集』に「郷祖神社」とあり、明治維新後に現社号に改称した。

例祭は7月26日。西町、港町の熊野神社、大川神社、東山神社、松尾神社、御崎神社、国府尾神社と水祖神社の7杜が参加して当番社を定め、地区住民が会同で執り行う。前日の7月25日を含め、川祭りとして八尾川の安全厄除け祈願の行事から神輿を出し、お旅祭りとして町内の渡御式がある。水難除け、海上安全、学業・受験合格にご利益があるとされている。

焼火神社

焼火神社は島前の西ノ島町にあり、祭神は天照大神の別名である大日霊貴尊。海抜452mの焼火山中腹にある焼火神社は日本海の船人に海上安全の神と崇められて来た。縁起は、旧暦12月30日の夜（大晦日）、海上から火が3つ浮かび上がり、その火が現在社殿のある巌に入ったとされる。それが焼火権現とされ、現在でもその日には神事「龍灯祭」が執り行われている。以前は隠岐島全体から集って神社の社務所に篭り、神火を拝む風習があった。現在もその名残で、旧正月の5日から島前の各集落が各々日を選んでお参りする「はつまいり」が伝承されている。

焼火神社社殿（写真提供:PIXTA）

例大祭の7月23日と24日の2日間は古来、島前中から人々が集って神輿を担いだが、昭和30年（1955）の遷宮を最後に廃止された。江戸時代には北前船の入港によって、海上安全の神と崇められ日本各地に焼火権現の末社が点在している。安藤広重、葛飾北斎の版画「諸国百景」では隠岐国の名所として焼火権現が描かれている。

社殿は享保17年（1732）に改築されたものであり、現在の隠岐島の社殿では最も古い建築とされている。建立当時としては画期的な建築方法で、大阪で作成され地元で組み立てられた。平成4年には国指定の重要文化財に指定された。城を偲ばせるほど広大な石垣の上に建設された社務所では、旧正月の年篭りの時に1,000人ほどの参詣人が火を待ちながら集うが、江戸時代には巡見使が400人以上の家来を率いて参拝した折りの記録も残っており、現在の客殿にその名残をとどめている。

【参考文献】『隠岐島の概要』（島根県刊）、神社本庁HP、『古事記』（竹田恒泰著、岩波書店）、『日本書紀』（竹田恒泰著、岩波書店）

取材こぼれ話

水木しげるの妖怪ブロンズ

漫画家水木しげる氏が鳥取県境港市の出身で、記念館が市内にあり、描かれた妖怪達が街興しに一役買っているのは有名だが、本名の武良茂氏の姓が元々隠岐島に縁があり、同氏との繋がりも深いことはあまり知られていない。

隠岐島島後の西郷港から中村港までの武良街道に、同氏が描いた妖怪達のブロンズが「妖怪誘導オブジェ」として8基設置されているそうで、そのうちのひとつが江戸時代後期に庶民の中から生まれた「アマビエ」である。「海中からいきなり出て来て予言をする妖怪」で、「漁に恵まれる」ご利益があるとのことだが、疫病除けにもなるとされるので、最近の新型コロナ騒ぎの中で注目され、日の目をみるようになったという。（米山）